黙示録1章1－3節 「イエス・キリストの黙示」

本文

黙示録の学びをこれから始めていきます。まず、黙示録を学ぼうと思った経緯についてお話ししたいと思います。

一つは、「平日における教会の集い」の目的です。私たちは礼拝において、創世記から順番に見ていき、神のご計画の全体を知っていこうとしています。そして平日において、私たちは、礼拝における旧約聖書の話では補いきれていない部分、けれども、教会が建て上げられるために必要な神の真理に取り組んできました。かつて火曜日の学びでは、聖霊シリーズを学びました。教会において、聖霊の働きは死活的なものです。聖霊の導きと力があり、また賜物が与えられてこその教会の命です。そして恵比寿の学びでは、かつてピリピ書を取り組みました。これは、教会における私たちのへりくだりを学んだと言ったらよいでしょうか。対立が起こっている中で、キリストを第一にして、へりくだり、他者を自分よりも尊いとして、主にある喜びの中で生きていくという、学びでありました。そして、成増の学びでは、ローマ書を見ています。これは神の救いについての、本当に大事な教理、教えであります。その続きとして、ガラテヤ書を恵比寿でも学んでいます。そしてここ東十条では、聖霊シリーズが終わったらテモテへの手紙を見て、教会におけるリーダーシップを学びました。ですから、聖霊の働きについて見てきましたし、救いについて、そして教会について見てきました。

そうして学んでいる中で、使徒たちの手紙において必ず出てくるのが、「主イエスの再臨」であります。教会がこの地上に置かれていて、それで主がすぐにでも戻って来られるという希望があるからこそ、ここで世の光、地の塩として存在することができるのだということを知ります。そして、ますます終わりの日が近づいているということを感じるようになりました。それは世界の動きがそうであるし、それ以上に、教会という世界の中で起こっていることが、まさに終わりの日における困難を示すものでありました。それで、黙示録を読んでいきます。黙示録は、いろいろなところで取り扱ったのですが、教会の中で本格的に取り組むのは初めてです。そして、黙示録は元々、教会の中で朗読されたからこそ、その本領を発揮するのだと思います。

1 イエス・キリストの黙示。これは、すぐに起こるはずの事をそのしもべたちに示すため、神がキリストにお与えになったものである。そしてキリストは、その御使いを遣わして、これをしもべヨハネにお告げになった。2 ヨハネは、神のことばとイエス・キリストのあかし、すなわち、彼の見たすべての事をあかしした。3 この預言のことばを朗読する者と、それを聞いて、そこに書かれていることを心に留める人々は幸いである。時が近づいているからである。

使徒ヨハネは端的に、この預言書の主題を「イエス・キリストの黙示。」と言っています。「黙示」という言葉を日本語の聖書は使っていますが、かなり語弊があります。これは、「啓示」と訳すべきものです。ですから、「イエス・キリストの啓示。」となります。啓示のギリシヤ語は、ἀποκάλυψις（アポカリュプシス）です。これは、「覆いが除かれる」という意味です。イエス・キリストの栄光が、これまでになく全てが明らかにされる、ということであります。ある人がこの言葉を、次のように例えました。市役所の前に、有名な彫刻家の彫刻の除幕式があることを想像してください。町の人々が集まってきて、市長があいさつをします。楽団がファンファーレの音楽を奏でて、そしてついに、彫刻を覆っていた幕が取り除かれます。そして、今まで隠されていたその彫刻の全容が、はっきりと現われ、明らかにされます。

イエス様は、世の始まりからその御姿が現わされています。ヨハネは福音書で、「はじめに、ことばがあった。」という言葉から始め、世の始まりにすでに、御子がおられたことを示しています。そして創世記から、主は、ご自分の姿を三位一体の神の第二格として啓示してこられました。ヘブル書の著者は、時代を追って御子が啓示されたことを次のように話しています。「1:1-2 神は、むかし先祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られましたが、この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。」イエス様ご自身が、そのことをユダヤ人指導者に語られました。「ヨハネ 5:39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。」そしてイエス様は、甦られた後に、弟子たちに対してご自身が聖書にどのように現われているのかを、説き明かされました。「ルカ 24:27 それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。」キリストの苦難について、そして、甦り、栄光の内に引き上げられることについて、旧約聖書から語られたのです。

旧約の時代において、預言者たちや義人が神の啓示を受けて語っているけれども、それで悟ることができなかったという葛藤がありました。黙示録には、ダニエル書からの引用がとてつもなく沢山出てきますが、ダニエルに対して御使いが最後に、「12:4 ダニエルよ。あなたは終わりの時まで、このことばを秘めておき、この書を封じておけ。多くの者は知識を増そうと探り回ろう。」と言ったのです。彼らは啓示を受けながら、その意味を悟ることができなかったのです。キリストについてのことであることは分かっていましたが、その正体を掴めずにいました。けれども、主が世に現れました。それで主は、天の御国の奥義の喩えを語られる時に、弟子たちに語られました。「マタイ 13:16-17 しかし、あなたがたの目は見ているから幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているから幸いです。まことに、あなたがたに告げます。多くの預言者や義人たちが、あなたがたの見ているものを見たいと、切に願ったのに見られず、あなたがたの聞いていることを聞きたいと、切に願ったのに聞けなかったのです。」そして使徒ペテロは、御使いでさえ知りたいと願っていたことだったのだ、と言っています。「1ペテロ 1:11-12 彼らは、自分たちのうちにおられるキリストの御霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光を前もってあかしされたとき、だれを、また、どのような時をさして言われたのかを調べたのです。彼らは、それらのことが、自分たちのためではなく、あなたが

たのための奉仕であるとの啓示を受けました。そして今や、それらのことは、天から送られた聖霊によってあなたがたに福音を語った人々を通して、あなたがたに告げ知らされたのです。それは御使いたちもはっきり見たいと願っていることなのです。」

聖書の最後の書物となるこの黙示録ですが、一にも二にも、「イエス・キリストが現わされること」が目的であります。この方の栄光が旧約の時代から現われ、そして人として生まれ、十字架につけられ、甦り、天に上げられました。この方が再び戻られる時にその栄光は全開します。この書物は、何にもまして、イエスがイエスとして現われ、旧約聖書における預言も含めてまだ明らかにされていない部分を明らかにしていきます。旧約聖書からの引用は五百以上あるとも言われています。ですから、旧約聖書を私たちは通読していますが、旧約が分かっているからこそ、黙示録の大切さを味わうことができるでしょう。私たち教会は、イエス・キリストの教会であるのにも関わらず、イエスを高く引き上げておらず、他の事柄の中に主ご自身を埋もれさせることはないでしょうか？私たちの思い、考え、気持ち、欲望によって、イエス様の名を唱えながら、この方を横に追いやり、教会の体裁を持っていないでしょうか？

これが、教会が誕生してからの課題でありました。ヨハネがこの啓示を受けたのは、紀元後 95 年と言われています。ですから、教会が始まったのが紀元後 30 年辺りと言われていますから、既に 60 年以上経っているのです。既に二世代、三世代の時代になっていました。ヨハネは、十二使徒の中で唯一、生き残っていた証人であります。他は全て殉教しました。特にヨハネは、自分の福音書や手紙の中で、イエス様を直に、その肉体も含めて、触れていたことを証言しています。それは、イエスは肉体を持っていなかったとするグノーシス主義がはびこっていたからです。そして、教会の中には愛が冷えていました。霊知と呼ばれるものはありましたが、主が初めに命じられていたこと、「わたしが愛したように、互いに愛し合いなさい。」という戒めが横に追いやられていました。その中で、もう弁解ができないように、ヨハネはあの手紙を書いたと言われています。とてもシンプルなのですが、あまりにも深いのです。ですから、二世代、三世代になっている中で、教会には堕落と背教の兆しが見えていたのです。

しかし、使徒ペテロが言ったように、「1ペテロ 4:17 さばきが神の家から始まる時が来ているからです。さばきが、私たちから始まるのだとしたら、神の福音に従わない人たちの終わりは、どうなることでしょう。」とあります。教会が聖なる主のご臨在によって、その来臨によって裁かれます。ですから、来臨の備えをしないといけません。ゆえに、使徒ヨハネは第一の手紙で、この来臨の希望は私たちを清めると言っています。「1ヨハネ 3:2-3 愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。キリストに対するこの望みをいだく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。」

このように、教会の内実が、イエス・キリスト中心ではなくなっていったことに対する警告があります。けれども、それは警告であると同時に、励ましであり、慰めです。イエス様が私たちの罪をご自分の血で洗い流し、私たちをご自分の恵みの中で終わりまで守ってくださるという保障を与えてくださっています。時は、紀元 95 年頃と先ほど言いました。教会に対する迫害が、激しくなっていた頃です。

教会は、主イエスが予告されたように世に憎まれるものであり、迫害を受けるようにして誕生しました。初めは、ユダヤ人の不信者からの迫害が激しく、ヨハネが黙示録を書き記した時もまだそうでした。けれども、ローマもまた迫害を始めました。ローマによる迫害は、皇帝ネロによるものが初めてです。紀元 64-67 年に起こりました。彼がローマに火を付けたのではないかと言われていますが、その火事をキリスト者のせいにしました。それで、キリスト者は十字架に付けられたり、野獣に殺されたり、火あぶりの刑にされたり、当時のネロは悪霊に付かれていたのではないかと言われるほど、気が狂っていました。パウロがテモテへの第二の手紙を書いたのは、その時です。67 年頃に書かれたのではないかと言われています。

なぜキリスト者がローマから迫害されたのか？福音が爆発的な勢いで拡がり、教会がローマの中に広がったのですが、ローマには皇帝崇拝がその社会の中に組み込まれていました。皇帝は、「主また神」と呼ばれ、また、「主であり救い主」と呼ばれました。そこでキリスト者が、イエスが主また神であられ、主であり救い主であると言っていたのですから、真っ向からその信仰告白が対立していました。そして人々は、ローマの神々への供え物や香をたくことが、慣習としても法としても義務づけられていましたが、キリスト者はそれを行ないませんでした。また聖餐式も、「キリストの体と血を食べて、飲んでいる。」という噂が広まり、人肉を食べているという噂もあったそうです。それから、奴隷が主人と同じ席で食事をしています。これでは社会秩序が乱れるという脅威がありました。また像を持たないので、無神論者であると非難されました。皇帝礼拝についてですが、イエスが救い主と言っても彼らは多神教なので、一行に構いませんでした。問題は、この方のみが救い主と主張したことだったのです。分かりますね、そう、私たちが日本社会に生きていて、その文化や体制が例外的ではなく、初代教会のキリスト者と同じようなものを共有しているのです。

そして、迫害も絶えず行なっていた訳ではなく、容認の時期もありました。ネロの迫害の後、ウェスパシアヌスとティトスは、キリスト教は容認していました。その後、皇帝ドミティアヌスが迫害を強めます。理由は、ユダヤ教の唯一神の信仰でありました。キリスト教もその中の一つとみなされ、事実、神は唯一だと信じていましたから、それで迫害をしていたと言われています。その時に、ヨハネも迫害を受けました。そしてパトモス島に流刑になりますが、その時に黙示録の啓示を受けます。彼が 96 年に死んで、次の皇帝になった時にヨハネは釈放されて、それでエペソで、主から受けた啓示を書き記して、それで黙示録があると言われています。

今、私は「日本キリスト教宣教史」（中村敏著）を読んでいるのですが、カトリックの宣教師が日

本に来た時から、それを歓迎する動きはあるものの、織田信長や豊臣秀吉は、自分の政治的目的を達成させるために歓迎したり容認したりしていて、秀吉の時は事あらば取り締まっていました。そして徳川幕府が始まってから、教会史上、類を見ないほどの大迫害が起こったのです。そして、明治時代に入って、欧米列強によっての圧力でキリスト教も認められたのですが、それでも太平洋戦争中は、迫害を受けました。今、信教の自由が守られていますが、それでも潜在的に、社会として文化として、キリスト教は受け入れがたいものという姿勢には変わりはないのです。

黙示録のもう一つの目的が、こうした迫害に備えて教会を強めるためでありました。ローマにおける歴史の激動の中でも、初めであり終わりであられる方が生きておられて、私たちを勝利する者として守ってくださる確証を与えてくださったのです。そして黙示録は、「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。（黙示 2:7 等）」とイエス様が言われているように、これらは全ての時代に通じる全教会に対して語られています。

ですから、「イエス・キリストの黙示」でありますが、黙示録の中ではどのように現われているかに注目して読んでいってください。例えば早速、5 節には、「1:5 また、忠実な証人、死者の中から最初によみがえられた方、地上の王たちの支配者であるイエス・キリストから」とあります。8 節には、「わたしはアルファであり、オメガである。」とあります。そして、イエス様がまばゆいばかりの、恐ろしい姿でヨハネに現れ、そして彼に対して、「1:17-18 恐れるな。わたしは、最初であり、最後であり、生きている者である。わたしは死んだが、見よ、いつまでも生きている。また、死とハデスとのかぎを持っている。」と言われます。2 章と 3 章にも、続けてこのようにご自身を現わされ、そして最後に、王の王、主の主として全世界に現れるのです。私たちは、現われる主にお会いする日々を送ります。そして現れてくださる主に対してひれ伏し、礼拝する日々を送ります。

そして「これは、すぐに起こるはずの事をそのしもべたちに示すため」とあります。ここの「すぐ」という言葉は、もっと正確に言うならば「速やかに」という意味です。同じ言葉がルカ 18 章 8 節で使われています。「あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます。」例えば、津波警報が出たけれども、一度、津波が来たら速やかに水が押し寄せます。

このような切迫性を、主の来臨について神は私たち教会に教えています。主ご自身は、「だから、あなたがたも用意していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから。（マタイ 24:44）」と言われました。パウロも、「今は救いが私たちにもっと近づいているからです。（ローマ 13:11）」と言いました。テサロニケ第一 4 章を見ますと、主が天から降りて来られる時に、「生き残っている私たち」と言っています。自分が死ぬ前に主が戻られるという期待をしていました。そしてヤコブは、手紙の中で「主の来られるのは近いからです。（5:8）」と言っています。ペテロも、「1ペテロ 4:7 万物の終わりが近づきました。ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい。」と言いました。主が速やかに来てくださるという信仰は主ご自身が、そして使徒たちがみな、共有しているものであります。

「神がキリストにお与えになったものである。そしてキリストは、その御使いを遣わして、これをしもべヨハネにお告げになった。」とあります。この預言が私たちにまで与えられた経緯は、初めに父なる神です。それからキリストに任されています。そしてキリストが御使いに使信をゆだね、そして御使いがヨハネに与えられます。そしてヨハネが書き記したものを、教会が受け取って読んでいます。ヨハネは、「僕」という言葉を強調していますね、それは、彼が自分の考えや気持ち、思いは排除して、ただ主ご自身の語られたことを忠実に守っているからに他なりません。

初めに、「神がキリストにお与えになったものである。」ということについて、イエス様は絶えずお語りになっていました。ヨハネが福音書で書いたものに、それが何度となく出てきます。例えば、ヨハネ 5 章 19-20 節です。「子は、父がしておられることを見て行なう以外には、自分からは何事も行なうことができません。父がなさることは何でも、子も同様に行なうのです。それは、父が子を愛して、ご自分のなさることをみな、子にお示しになるからです。」父と子の関係を知っている人は、自分で思い浮かんだことを語ろうと言う気持ちが起こりません。御子は御父に愛され、御父に示されること以外のことを語られたり、行なわれたりするつもりは何一つありませんでした。ゆえに、父と子は一つであり、ご自分で独立して何かをされることはなかったのです。その交わりの中に、イエス様は私たちを招き入れてくださいました。「1ヨハネ 1:3 私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。」私たちが、良い意味で瓜二つになるんですね。父と子の交わりの中に私たちも入り、それで私たちも一つにされているのですから。

ということで、ヨハネも自分の語ることは、ただ神からの言葉のみ、そしてイエス・キリストをそのまま証言するのみ、というのが 2 節に来ます。その前に、御使いの働きについて話したいと思います。「キリストが、御使をつかわして」と言っているからです。黙示録には、数多く御使いの働きが書かれていますが、これは真新しいことではなく、まさに旧約時代から新約に至るまで見ることのできる働きです。エデンの園で、ケルビムが炎の剣をもって守っていました。

そしてモーセの律法ですが、その時に御使いによってモーセは律法を受けていることを知ることができます。ステパノがこのように証言しました。「使徒 7:53 あなたがたは、御使いたちによって定められた律法を受けたが、それを守ったことはありません。」使徒パウロが、ガラテヤ書でこう言っています。「3:19 では、律法とは何でしょうか。それは約束をお受けになった、この子孫が来られるときまで、違反を示すためにつけ加えられたもので、御使いたちを通して仲介者の手で定められたのです。」シナイ山に主が天から降りてこられた時に、とてつもない恐ろしい光景になりましたね。「出エジプト 19:16-19 三日目の朝になると、山の上に雷といなずまと密雲があり、角笛の音が非常に高く鳴り響いたので、宿営の中の民はみな震え上がった。モーセは民を、神を迎えるために、宿営から連れ出した。彼らは山のふもとに立った。シナイ山は全山が煙っていた。それは主が火の中にあって、山の上に降りて来られたからである。その煙は、かまどの煙のように立ち上り、全山が激しく震えた。角笛の音が、いよいよ高くなった。モーセは語り、神は声を出して、彼に答えら

れた。」ここにある雷、稲妻、角笛、また火、煙などですが、これから黙示録を読んでいると、絶え間なく出てきます。天において御使いが活動する時に、また、地上に災いを下す時にどんどん出てきます。例えば、次のようにあります。「8:5 それから、御使いは、その香炉を取り、祭壇の火でそれを満たしてから、地に投げつけた。すると、雷鳴と声といなずまと地震が起こった。」

その他、主は使いによって事を行なわれました。ヨシュアに対しては、主の軍の将として現れてくださいました。士師記において、士師ギデオンにも、「シャローム」と言って現れてくださいました。主に仕える御使いたちもたくさんいます。ダニエル書には、神の言葉を伝える御使いガブリエルがおり、特に重要なのはキリストが来られることをダニエルに伝えたのが、ガブリエルです。「9:20-22 私がまだ語り、祈り、自分の罪と自分の民イスラエルの罪を告白し、私の神の聖なる山のために、私の神、主の前に伏して願いをささげていたとき、すなわち、私がまだ祈って語っているとき、私が初めに幻の中で見たあの人、ガブリエルが、夕方のささげ物をささげるころ、すばやく飛んで来て、私に近づき、私に告げて言った。「ダニエルよ。私は今、あなたに悟りを授けるために出て来た。」そして聖なる都とユダヤ人については、七十週が定められていると告げ、油注がれた者、メシヤが断たれることを伝えました。そして、御言葉を告げる御使いの働きだけでなく、ダニエル書10 章では、戦う御使いミカエルの姿も伝えています。イスラエルのために戦っています。黙示録12 章にも登場します。そしてエゼキエル書にも天使的な存在はいますし、ゼカリヤ書においては、御使いが大活躍しています。

イエス様の地上の生涯には、御使いの奉仕は欠かすことのできないものでした。マリヤがイエス様を身ごもったのを伝えたのは、ガブリエルです。そして、イエス様が荒野において誘惑を受けられて、その後に仕えたのも御使いであります。「マルコ 1:13 イエスは四十日間荒野にいて、サタンの誘惑を受けられた。野の獣とともにおられたが、御使いたちがイエスに仕えていた。」そして、主がゲッセマネの園で苦しみ悶えて祈られた時も、御使いが助けに来ました。「ルカ 22:43 すると、御使いが天からイエスに現われて、イエスを力づけた。」そして、主が復活された時に、大地震が起こりましたが、それは御使いが来たからですね。「マタイ 28:2 すると、大きな地震が起こった。それは、主の使いが天から降りて来て、石をわきへころがして、その上にすわったからである。」そして、主が昇天された時も、弟子たちに主が戻って来られることを伝えたのは二人の「白い衣を来た人（使徒 1:10）」でしたが、御使いでしょう。そして使徒たちも、御使いに助けられており、例えばペテロが牢獄から出てきたのは、御使いのおかげでした（12:7）。それで、使徒ヨハネにはこの啓示と預言を受ける時に、絶え間なく彼に助け、仕えてくれているのです。

そして、「御使いを遣わして、・・お告げになった。」とありますが、ここの「お告げ」は、英語ではsignify という訳が使われています。「認証」というような意味ですが、ギリシヤ語では、「徴や象徴によって、明らかにする」という意味です。黙示録には、ご存知のように多くの徴や象徴による啓示が多いです。ヨハネは、福音書の中にも「しるし」という言葉をたくさん使いました。真理を示すためのしるしです。それで、多くの人はしるしや象徴の多い黙示録の意味が難解だとして、避ける傾向

があります。実は、紀元前後はユダヤ人の間では、黙示文学というのが広まっていて、こういった文体のものはかなり多かったようです。

けれども、黙示録は難しくありません。一つは、旧約聖書からの引用が膨大にあるということです。徴や象徴が出てきても、それがかつて預言者によって語っていたものがありますから、どのような文脈で使われていたのかを容易に見つけることができます。そして、もう一つはあまり難しく考えてはいけない、ということです。イエス様の喩えにも起こりがちですが、イエス様は一つの要点を語るために喩えを使われたのであって、そこに隠されている意味を人々が探るために使われたのではありません。同じように、黙示録においての象徴的表現も、その象徴自体に意味があるのではなく、真理を明らかにするためにそのような形で、ヨハネに示してくださっているのです。さらには、ダニエルもそうでしたが、将来の事柄についての預言でありますから、当時の社会ではあり得ないことも語らなければいけません。しかも、当時存在するものによって表現しなければいけません。ヨハネがたとい現代に起こることを預言したとしても、当時は存在しないものを語る時、他の比喩が使われていることがあります。

そしてヨハネは、「2 ヨハネは、神のことばとイエス・キリストのあかし、すなわち、彼の見たすべての事をあかしした。」と言っています。ここが、ヨハネの好きなところです。彼は、福音書においても、手紙においても、注意深くこのことを行ないました。自分の言葉ではなく、神ご自身の言葉をそのまま聞き、それを書きとめました。ですから、黙示録は神の言葉なのです。単純なことですが、教会においておざなりにされています。自分たちの都合の良いように解釈して、精密な、聖書釈義を行なわないでいます。過去の文学であるとして封じ込めたり、また私的解釈をして扇動的なことを言ってみたりします。グーグルで「黙示録」と検索すると、なんとなんとわんさか出てきます！神のことばとして受けとめていないからです。

そしてヨハネは、「神のことば」が、「イエス・キリストのあかし」と密接に結びついていることを話しています。これは福音書にも表れていました。「1:1 初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」そして、ことばが肉となって現れたのです。ヨハネ第一の手紙にも書いていましたね。「1:1 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目で見たもの、じっと見、また手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて、」神のことばによって、イエス・キリストがどのような方なのかを証しされています。したがって、私たちは自分勝手なイエス様を描くことはできないのです。この方に近づくには、神の言葉によってであり、また反対に、神の言葉に触れれば、私たちはイエス・キリストの証しに触れることになるのです。いろいろな聖書預言の解釈がありますが、イエス・キリストの証しから外れたものは偽りであります。必ず、イエスという方の証しになり、そしてこの方から命の水を飲みなさいという福音になります。

そして「3 この預言のことばを朗読する者と、それを聞いて、そこに書かれていることを心に留める人々は幸いである。」とあります。

当時は、現代のような印刷術がありませんでしたから、手紙が諸教会に回って、それを指導者が会衆に読み聞かせる方法を取っていました。ですから、朗読して、それを聞いていくという営みはとても大切になります。読むことも大事ですが、これを朗読、そして聞くということが教会の中で行われる時に、初代教会と同じことをしていることになります。パウロがテモテに勧めました。「1テモテ 4:13 私が行くまで、聖書の朗読と勧めと教えとに専念しなさい。」

そして、聞くだけでなく、「そこに書かれていることを心に留める」とあります。これは、「守る」と訳したほうがよいでしょう。私たちは要は、心に留めて、それを守ることが必要です。守るというのは、何か規則を守るというよりも、「保全する」と言ったほうがよいでしょう。例えば、私たちがダムを管理する作業員だとしましょう。ダムの水を、どんなことがあっても管理して、洪水を防ぎ、また水道への供給を絶やすことはありません。それと同じように、私たちがイエス・キリストの教えを保つのです。そうすれば、この方から出てくる生ける水が、絶え間なく私たちに流れ、私たちから溢れ、人々にも広がります。守ることについて、「そうではない！」とする誤った教え、誤った行動が押し寄せてきます。それでも、守るのです。これが初代教会がしてきたことであり、私たちのすることです。パウロはテモテに、「2テモテ 1:14 そして、あなたにゆだねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって、守りなさい。」と言いました。

そして、「幸いである」と言っています。黙示録には、幸いの道が内蔵されている言葉がたくさん出てきます。「14:13 今から後、主にあって死ぬ死者は幸いである。」「16:15 目をさまして、身に着物をつけ、裸で歩く恥を人に見られないようにする者は幸いである。」その他、19 章 9 節、20 章 6 節、22 章 7 節、22 章 14 節です。それぞれに幸いの定義が書いてありますが、私たちは今、こうやって朗読し、聞いて、そして心に留め、さらに保持しようとしています！これは幸いなことなのです。

そして、「時が近づいているからである。」とあります。ここで使われている「時」はカイロスです。ギリシヤ語にはクロノスという言葉もあります。「クロノスというのは、時計などで計ることができる時間です。今日は 3 月 2 日であるとか、何時何分であるとか、1 時間は 60 分であるとか、そういう物理的、客観的な時間です。都会のビジネスマン、いやそれにかぎらず都会の人はほとんどこのクロノスに 24 時間縛られています。今は何時だから起きる、何時に会社に行く、何時だからお昼を食べる、何時だから寝なければならない、・・ ・・・しかし、地方の農村や漁村の人は、今日はしけだから漁は休みだとか、今年は暖かいから早めに収穫の時期がきたとか、必ずしもクロノスに支配されているわけではないのです。そもそもクロノスというのは、人間が時計というものを発明してつくった人間の時間なのです。自然界には時計は存在しません。あるのはカイロスなのです。

カイロスという時間は、たとえば「今日はしけだから漁に行けない」とか、「今年は暖かいから収穫が早めだ」とか、そのようなタイミングとかチャンスというものを意味しています。農業とか漁業というのは、クロノスよりもカイロスを大事にしなければならないわけです。そういう人たちには、クロ

ノスばかりを考えた時間管理術などはまったく役に立ちません。今が何時何分であるか、何月何日であるかということよりも、今がどういう時であるか、この時にどんな意味があるのか、どんな価値があるのか、そのことを知ることが重要なのです。カイロスは、人間がつくったり、管理したりすることができない時間です。管理するのではなく、いつ訪れるか分からない時を待つこと、見極めること、捕らえること、それがカイロスという時間を生きることです。クロノスが人間のつくった時間であることに対して、カイロスは神が備え給う時間だと言ってもいいのではないでしょうか。」[1]

このように、時というのは機会であり、ある意味で空気と言ったらよいでしょう。主が来られる時は近いのです。

[1] http://www2.plala.or.jp/Arakawa/heb03.htm